



## ●特集● 保育学の未来を問う～学際性を求めて～

保育学と関連の深い、しかし異なる学問領域（音楽学・建築学・栄養学）を専門とする3名の識者がそれぞれの立場から展望した「保育学の未来」（第65回大会実行委員会企画シンポジウムⅠ）——そこで浮かび上がった「学際性」というキーワードは、保育学の魅力の再発見を予感するものであった。本特集でさらに議論を展開してもらおう。

### 保育学の拡がり—学際性を求めて

阿部 明子

人間が生まれて人として育つのは、本来持っている育ちの力が、人間関係はもちろんのこと、あらゆる生活環境とさまざまな形で関わりながら行なわれていくためである。子どもの育ちを観るのは生活の中でといわれる所以である。

保育学の研究が、従来、保育に関心のある者が保育の現場の求めに応じた形でなされたことが多かったこと、“まず子どもを”という視点はまだまだ浸透していないことから、第65回大会のテーマは「Children First」と示された。

それを受けて、今後の保育学の研究方向を未来へ向けて考えるきっかけとして、他の専門領域から、日常生活の中で必然的に子どもの姿を捉えたり、物理的環境と子どもの関わりを考えておられる方々を招き話し合ってみようとして、実行委員会企画シンポジウムⅠ「保育学の未来を問う」が設定された。そこには、企画に当たった故佐伯一弥氏の、改めて保育学の魅力を確かめるとともに、これからの展開への可能性についての糸口が見つかるのではないかと願いが込められている。そして、話題提供をしてくださる方を探して依頼されたのであった。

栄養学、特に栄養指導に携った森岡加代氏からは、ただ栄養学的な食事を奨めるだけでよいのかとの疑問が生じ、「食育」が話題となっている今、子どもの生活として食を総合的に捉え直す時期がきている、という実感を通しての提言がなされた。

音楽学の視点からは、「ひとつの音に世界を聴く」との言葉に出会い、自然物に耳を押し当てて音を味わっている子どもの姿に、人が音と関わって生きるこの意味が、子どもの生活の中すべてに見出されることを知った。ただ、その意味を根拠のある言葉で語ることは難しい。しかし、子どもたちを支える保育者の姿から力を得ることが多いので今後の課題となる、と今川恭子氏より発言された。

建築学を学び、人間の心理行動から研究を始められ、保育所に関心が向き、「子どもの社会性獲得と空間との相互関係」を考察し、発表された佐藤将之氏からは、システムとしての「場所」の考察がなされていない状況が示され、建築は変え易い空間のある方が、さまざまな環境設定がしやすく、常に創り続ける保育環境であってほしいとの提言がなされた。なお、研究の方法論については、他分野のさまざまな方法論を探し試していくことが必要であると思うと述べられた。

改めていうまでもなく、共通しているのは、子どもたちの日常生活の中から、各々の専門分野の視点から解明を試みておられることである。そして、それらの提言に保育学の立場から多くの示唆を得た。

この3分野のみでなく社会的な人間と環境との接点のある学問であれば、どの専門分野でも子どもとの、また子どもからの視点はあるはずである。保育学はその中心にあるといっても過言ではなからう。今後ますます学際的に多方面に幅広く研究を包括していかなければならないし、働きかけも行わなければならないと思う。

#### ●Profile

阿部 明子（あべ あかし）  
東京家政大学 名誉教授、財団法人文民教育協会 理事  
子どもの文化学校 校長、社会福祉法人同胞援護婦人連盟 顧問  
今、最も子どもたちの育ちと文化環境の関わりに関心がある。  
幼稚園教諭の経験を生かし、保育者の学びの場を創っている。

## 人と音のかかわりを見つめる フィールドから

今川 恭子

保育学の未来を語れる立場に自分がいるのかどうか、シンポジウムを終えた今も定かではありません。ですが、私がこれまでに「子どもと音」のかかわりを見つめて発信してきたことがなんらかの「保育学らしさ」をもって受け止められたとしたら、それはとても嬉しいことです。

私が「子どもと音」の世界から目を離せなくなった背景には、そもそも学部時代に専攻した音楽学での学びがあります。音楽とは何か、その答えは音という対象の側にあるのではなく、「人」の中にある。技術と知識の塊として流通する音楽以前の、もっと根っここのところでの人と音のかかわりこそが大事なのであって、そこに生きる人が「音を聴いたり」「音をつくり出したり」「音で人とかかわったり、あるいは音で世界とかかわったり」する営みの積み重ねこそが音楽なのだ、ということです。これを聞いて、「それは日々子どもがやっていることだ」と子どもの姿に重ねあわせる方も少なからずおられるのではないのでしょうか。雨の日に黙って木の幹に耳をあてる子ども。自分の口にあてた筒から出る声が面白くて声色を工夫する子ども。友だちのトンカチの音とわざと同時にしたたり交互にしたたりする子ども。何気ない日常に生きる子どもたちが鮮やかに実践していることを目の当たりにした時、私は「人と音・音楽」のかかわりの根源を子どもたちから教えられる思いでした。人が音とかかわって生きることの意味は子どもの生活の中にすべて見出されると気づき、以後、私の研究は、子どもたちが生きるフィールドに立ち、そこで見聞きしたことから理論を構築していこうとするものになりました。

音楽学から出発して音楽教育の世界に入り、「人と音・音楽」のかかわりの根源を子どもの中に見て、そして子どもから学んで来た道筋の中で、私の中に矛盾が起きたことは一度もありません。もしもこのような自分のスタンスの中に「保育学らしさ」があるとしたら、そのことにはとても大きな意味があるのではないかと思います。私は方法論的には折衷的です。フィールドではできるかぎりありのままの記録をとろうと努めていますが、記録の形式にしても分析方法にしても、子どもたちと自分との間で常に探し求めている感があります。この「探し求める」過程で悩みを抱えたり困難に突き当たったりすることもあります。そんなときに学際性という言葉が

私にとって重要な意味をもちます。ものごとの見方、考え方、記録の集め方や分析の仕方を検証し、そのときどきで最適と思えるものを見つけ出す上で、複数分野の見方、考え方、方法論に触れることはとても有意義です。それによって壁を越える方策を見つけたり、自分自身を検証したりすることができるからです。いま、研究者としての自分のアイデンティティがどこにあるのかと問われたら、それは子どもから学んだことによって問いを立て直し、磨き続ける、という根本的な姿勢そのものにある、と答えるだろうと思います。そしてこの姿勢が私にとっての「保育学らしさ」なのかもしれません。

### ●Profile

今川 恭子 (いまがわ きょうこ)

聖心女子大学 准教授

主に家庭や保育現場でのフィールドワークを通して、乳幼児期の表現の育ちを音楽的な視点から研究しています。

## 保育環境デザインを通して考える 保育学研究

佐藤 将之

筆者は、建築学を大学で学び、人間の心理行動からみた研究を始めた。大学3年生の終わりから保育所に通い始め、「こどもの社会性獲得と空間との相互関係」を考察してきた。最近は、「こども環境」について面白いと思ったもの全てを研究の対象としている。以下、保育学研究への問題意識であると自分が意識していることを3つ記すが、知識不足を寛大に受け止めていただければ幸いである。

### 1. 保育環境を考えるきっかけを作る：

#### 「場所」概念のススメ

保育学の特徴は、物理的環境としての保育施設と関わる保育学研究を基に、応用・実践できる場所があることだ。日本保育学会の会員には、実践者が含まれていることが特徴であるものの、研究の表現は個々のケーススタディー色（文化差、個人差によって結果が支えられている）が濃くなっている。人がいる・ものを置く「場所」を考えることが、保育の質やシステムとしての保育環境を捉えることにつながっていく。

### 2. 「創り続ける保育環境」を支える：

#### プログラムデザインからプロセスデザインへ

保育する場所・環境設定を変えようとする時には「どんな保育をしたいか」という保育者らの思いや保

育計画の見直しなどが必要となる。回を重ねるほど、保育を通して創りたい人間像とそれを達成するための具体的な環境設定が煮詰まる。何をやれば育つというプログラム検討よりも、その試行のプロセス・過程が、保育者の環境設定能力を育むと同時に、どんな子どもに育ててほしいかという具体的な保育理念づくりにつながる。

建築は作り過ぎない。変えやすい空間・建物では、様々な環境設定の試行が行われやすいからである。筆者は、常に創り続けるための実験等試案を用いて、人間の真理を明らかにしようとしている。

### 3. より多くの方法論を試行する：

#### それぞれの園で「独自に」環境をカスタマイズ

上記「プロセス」を中心とした研究方法は、その方法論の開発・緻密さが競われているわけではない。何らかの方法を利用して環境がアップデート（更新／造り替え）されていく過程や時間に面白さがある。極端に言えば、方法論は何でもいい。むしろ特定の方法論を極めるのではなく、他分野の様々な方法論を探し、試すことが必要である。したがって、保育実践では、それぞれの園において自分なりにアレンジしていくプロセスを期待したい。

以上は、主に建築学を中心としている山田あすか氏・藤田大輔氏らと議論しあって培われており、建築学を中心とした保育環境論が発展している。筆者は、彼らを中心とした研究者たちと意思を共にし、保育環境での工夫や事例を事典として執筆中である。

#### ●Profile

佐藤 将之（さとう まさゆき）  
早稲田大学 准教授  
こども環境に焦点を当て、建築や都市をフィールドとした環境行動研究を進めている。  
著書に「フィールドワークの実践 ―建築デザインの変革をめざして―」（朝倉書店）など。

## 子どもの傍らに在ることの意味

森岡 加代

2012年5月に開催された日本保育学会のシンポジウムに故佐伯一弥先生から声を掛けていただいた。

私でいいのかという躊躇はあったが、これまで食の分野で感じてきたことを他の分野の方々と語り合える魅力が勝った。私に関わった子どもの食生活や食行動、養育条件等の研究に用いられる方法は、調査が中心で統計処理と分析を行い、対象を集団とし

て捉え、問題点やその要因、関係性等を明らかにしていくものであった。私は研究を重ねる中で、子どもの姿を捉えきれていないのではないかという不安と不満を持つようになっていた。いくら問題点を指摘し理想を描いてみても、変わっていかない現実を感じていたからである。

そんな時、千葉明德短期大学から小児栄養をやってみないかと誘っていただいた。「但し、従来の小児栄養は教えるな。本当に子どもは残さず食べなきゃいけないのか？」と言われ私は衝撃を受け、慌てて保育系の研究会に加えていただいた。メンバーは当然保育の研究者、保育系養成校や幼稚園、保育所等現場の先生方である。

回を重ね研究方法や考え方の違いを知り、理解していくうち、少しは子どものことを理解していると思っていた私が発見したのは、子どもの傍らにいない自分自身の姿だった。そのうち「どうして栄養士ってそうなの？」と、保育所で子どもを挟み保育士と栄養士の意見が対立する事例をあげ、談議を持ちかけていただけのようにもなった。

例えばこんな話である。自然に恵まれた保育所、子ども達と散策中グミの木を発見。実を採って、皆で「甘い」とか「渋い」とか言いながら食べる。キラキラした子どもの様子が目に浮かぶ。しかしO-157事件以来それは許されない。子どもの安全と引き換えにした保育をどう担保するのか。食育活動で窓辺に色づいたトマトや苺にも同様の場面は生じるであろう。「栄養士さんには内緒だよ」というささやきも聞こえる気がする。

子どもに何を伝えればよいのだろう。私は、保育士・栄養士両方の養成に関わっていて思うことがある。保育士は食を子どもの生活の一部として、栄養士は子どもを人生の一部として学習している。保育士は食と子どもの食事場面以外の育ちとの関連性を学ぶことが少なく、栄養士は保育について学ぶ時間が充分ではない。両者は保育所で専門職として従事するが、良好なコミュニケーションがとれていない園では必ず問題を抱えている。栄養士の校外実習で保育所を巡回していて感じることもある。

保育学や学際性というレベルではないが、子どもが育つ場で繰り広げられている現実である。私は現在、子どもと触れ合える場としてNPOの親子教室に関わっている。家庭で育つ子ども達と一緒に遊び、母親と座談会を行い、親子を同時に観ることができ。子どもの姿を観て、保育者と話し合いながら母親の本音を引き出し、納得してもらい、行動となるまで見守るにはかなりの時間と手間がかかる。加え



て社会のあり様は生活に大きく影響し、その中で子どもは日々育っている。今こそ各分野で、子どもの傍らにいる意味を考える時ではないか。

### ●Profile

森岡 加代 (もりおか かよ)  
千葉明德短期大学、東京家政大学 非常勤講師  
大妻女子大学 特任講師  
担当科目「子どもの食と栄養」「校外実習指導」  
保育士・栄養士養成に関わりながら、NPO法人江東親子サポートセンターで食育活動をしている。

## 造形による実践からの保育学

矢野 真

近年の保育者養成において、子どもの保育と保護者支援のため保育者に必要とされる知識・技術・判断力など、より高い「保育者の専門性」について語られ、「保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術」として、表現技術を保育との関連で修得する必要性が提示されている。また、保育の特性や保育者の専門性に根ざした保育実践を明確にする重要性から、保育と関連する様々な職種の業務内容や専門性との関連、地域の子育て力の向上、地域社会との協働などを模索する必要性も示された。

保育実習を経験した学生たちのなかで、「子どもたちに即した効果的な言葉かけや関わりをしていくためには実習だけでなく、一日でも多く園の子どもたちと関わりを持つことが必要になってくる」と振り返る学生が多くみられる。これは子どもの造形を考えていく上でも重要なことである。実際の保育現場では、時間、材料、子どもへの技術支援、保育者や実習生の技能の問題などが生じ、造形の講義・演習で培ったものだけでは対応できないことも多い。そこで、私が担当するゼミナールにおいて、保育現場との連携による継続的な造形ワークショップの実践を試みている。活動内容は保育現場それぞれによって異なるが、どの造形ワークショップにおいても、確実な保育者としての実践力の育成、および保育者養成校の持つ知的・人的資源を用いて、いかに実際の現場へ貢献していくかということを目的としており、自身を含めた保育者養成校の教員側も、実際の現場で必要とされるスキルを身につけるためのカリキュラムを再考する実践としている。このように継続的な造形ワークショップの活動を通して、以下の

ような効果が得られることがわかった。

- ①保育者養成校と保育現場、保育者と学生の連携により、現場に必要な実践力の育成はもとより、講義で培った理論的な構築も可能となること。
- ②学生の実践力について、理想論で終わらずに実際の保育現場で必要とされるスキルを身につけることが可能となること。
- ③保育者養成校の教員による保育現場で働く現職者へのリカレントとともに、現場で必要とされる教材や実践の考察ができること。

今後も、こうした効果をさらに得るために、保育現場での造形ワークショップや保育ボランティアとして保育者養成校の教員・学生が積極的に参加することにより、実際の保育の現場についての理解を高めていく必要がある。そして、保育者養成校における造形担当の教員は、実際の現場で必要とされるスキルを身につけるためのカリキュラムの見直しを図りながら、学生や保育現場で働く現職者へ常に新しい情報を提示していくように心がけていく必要がある。

このように、造形による実践を通して「保育者の専門性」とは何か、そしてその専門性を育てるために必要なことは何かについての具体的な検討を行っていくことは、これからの保育学の未来を考える上で最も重要なことであると考えている。



造形ワークショップにおける学生の様子

### ●Profile

矢野 真 (やの まこと)  
京都女子大学 准教授  
児童文学や表現技法などを保育の表現領域と関連付けながら、オリジナル技法による立体造形の制作活動を行っています。現在は、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発について、造形ワークショップなどの実践を中心として研究を行っています。